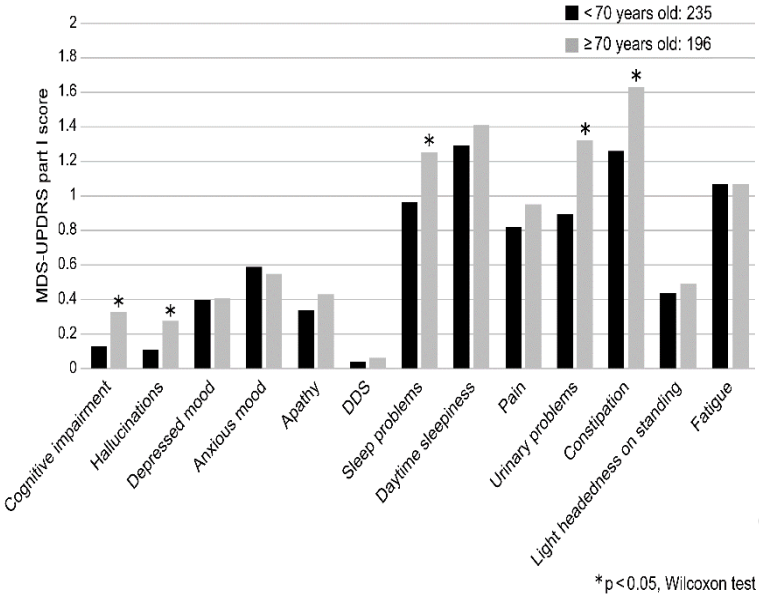
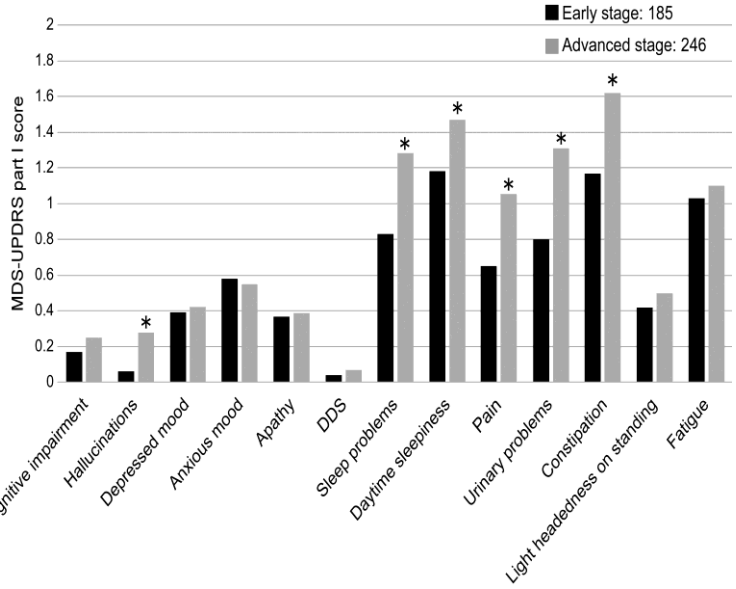
Associations between non-motor symptoms and patient characteristics in Parkinson's disease: A multicenter cross-sectional study

Remi Morimoto, Mutsumi Iijima, Yasuyuki Okuma, Keisuke Suzuki,
Fumihito Yoshii, Shigeru Nogawa, Takashi Osada and Kazuo Kitagawa

Frontiers in Aging Neuroscience.2023 DOI 10.3389/fnagi.2023.1252596

【目　的】パーキンソン病(Parkinson’s disease: PD)は、運動症状に加え便秘、嗅覚障害、睡眠障害、精神障害など、多様な非運動症状(nonmotor symptoms: NMS)が現れる。今回われわれはPDのNMSの特徴と、年齢、性別、罹病期間によるNMSの違いを評価し、NMSに関与する因子を検討した。
【方　法】2015年2月から2022年7月まで6施設より登録されたMini Mental State Examination 24点以上の外来PD患者を対象とした。PDの評価は、Movement Disorder Society Unified Parkinson’s Disease Rating scale (MDS-UPDRS) パートI～IVを用い、NMSは、MDS-UPDRS パートI (非運動症状の自己評価)、レム睡眠行動障害(rapid eye movement behavior disorder: RBD)質問票により評価した。年齢は70歳未満群と70歳以上(高齢)群に分類、罹病期間はカットオフ値を5年として早期群と進行期群に分類、性差は男性と女性に分類し、パートIを比較した。
【結　果】PD 431例(男性202例、女性229例)、平均年齢67.7歳、平均罹病期間6.4年、MDS-UPDRSパートI総スコアは平均9.9であった。パートI総スコアは罹病期間、パートII、III、RBDと有意に正相関($p<0.01$)した。パートIの下位項目について、高齢群では、認知機能障害、幻覚、睡眠障害、排尿障害、便秘で有意に高く、進行期群では幻覚、睡眠障害、眠気、痛み、排尿障害、便秘で有意に高値であった。性差では、不安感は女性で高く、眠気、排尿、RBDは男性で高かった。パートIに影響する因子は、罹病期間、MDS-UPDRSパートII、IV、RBDであった。
【結　論】自己質問評価によるNMSは、高齢、罹病期間が長い、自覚的・他覚的な運動機能の低下を有する患者で重度であった。また、性差を認めた。